

ディケンズ時代の女性 (2)

増 田 秀 男

I. 〈女の一生〉——ヴィクトリア時代と現代

『ドンビー父子商会』(*Dombey & Son*, 1846-8) はポールの誕生とその母親の死によって始まる。いわば誕生と死がこの小説のストーリーをスタートさせている訳である。

しかし、この小説の始め方は、20世紀も終わろうとしている時代に生きている私たちには、あまり大きな感情的な訴えを持たない。子の誕生と母親の死が繋がる経験は私たちに縁遠いものになっているからである。何しろ現在のイギリスでは、出産時に母親が死亡する〈確率〉は、六万分の一(Perkin, p. 65)であり、また、広く pregnancy-related causes によって女性が死亡する率は、先進国の平均で一万人に一人(Doyal, p. 11)だからである。出産あるいは妊娠による死は、20世紀末の先進国に生きている私たちにとっては〈統計上の〉出来事に近いものでしかないのである。

だが、ヴィクトリア朝の人達にとっては、出産による死は非常に身近なものであった。ドンビー夫人の場合のように、それが自らに降りかかってくることもあった。しかしまたそれは、少なくとも自分が住んでいるストリートの誰それが、あるいはまた親戚の誰それが、お産で亡くなったというような形で、誰もが〈経験〉できるものであった。何しろ、当時の女性の出産時の死亡率は、二百人に一人強(Perkin, p. 65)だったのである。そしてこの率は1910年になってもようやく千人に一人(Ibid., p. 72)になるだけである。出産時の母親の死は、実に長い間身近なものであり続けた訳である。そして出産による死が身近なものであったということは、出産が、当人は勿論、周囲の人達にも死の脅威を感じさせるものであったということであった。『ボズのスケッチ集』(*Sketches by Boz*, 1836-7) の *The Four Sisters* に描

かされている、出産間近の女性のいる家に、ご近所の人達が毎朝召使を走らせて、妊婦の健康状態を確かめる〈習慣〉も、出産が生命の危険を伴うものであるという、深く染みついた認識と無縁ではないであろう。また、同じく『ボズ』の *Our Next-door Neighbour* に描かれている、深夜に訪ねて来た人がいると、臨月でもないのに、嫁にやった娘に何かあったのかと先ず案じる父親の姿にも、死への恐怖を読み取ることができる。『ドンビー父子商会』の冒頭の誕生と死は、喜びと悲しみが同時に来るこの経験に親しい読者には、きわめてリアルなものだったのである。ちなみに地域によっては現代でも同じ状況が続いている。ヴィクトリア朝のイギリスにおけるよりも pregnancy-related causes による女性の死亡率がさらに高い——23人に一人という——地域が今も存在するのである (Doyal, p. 11)。

これまで見てきたとおり、ヴィクトリア朝の人達にとって、妊娠、出産は死への恐怖に繋がるものであった。しかもこの時代の女性は、妊娠、出産を現代の先進国の女性よりも、はるかに頻繁に経験したのである。ヴィクトリア朝中期の既婚女性は、平均5.5から6人の子供を生んだ(Weeks, p. 45)のである。それに対して1990年の先進国女性の平均子供数は、1.8人(国連, p. 122)である。現代の先進国の女性は、ヴィクトリア朝の女性に比べて、出産の回数点でもさらに〈統計上の死〉から遠ざかっているわけである。もっともヴィクトリア朝のうちすでに、女性たちの出産による死の恐怖の経験回数は徐々に少なくなっていた。20年以上続いた結婚の平均子供数を見ても、1860年代6.16人、1870年代5.8人、1880年代5.3人、1890年代4.13人と着実に減少し(Bourke, p. 45)、1925年～29年の時点で夫婦の平均子供数はすでに2.2人になっている(Weeks, p. 45)からである。1922年にサンガー夫人が唱えた a free motherhood (Frazer, p. 51) の「自由」の中には、出産による死の恐怖からの「母性」の解放という意味合いも含まれていたのである。

なお、豊かな家庭の夫人であるドンビー夫人が自宅で、また、夫人の死後ドンビー家の乳母になる、貧しい家庭のポーリー・トゥードルが病院で出産するという点は、現代読者にとっては奇妙なことに思われるかもしれないが、当時は豊かな家庭の夫人は自宅で医者の手によって出産したのである。当時の病院は感染症の巣であったから、また、病院はまず貧しい人達が利用するものであったから、金持ちの家の女性は自宅で出産したのである。病院での

(普通、男性の医師の手による) 出産が、家庭でのそれを上回るようになるのは1900年 (Mitchell, p. 139), また、病院での出産が一般的になって、病院の authoritarian, unsympathetic な性質が問題視されはじめるのは、1940年代からである (Cosslett, pp. 54-55)。

現代の出産の経験がヴィクトリア朝のそれと、量的に、また質的に異なるものになったのと同じように、女性の人生、すなわち〈女の一生〉も量的、また質的な変化を見せている。

19世紀半ばに女性が〈統計上〉生きることのできた人生は、40年とちょっとであった (Mingay, p. 276)。そしてそれは、ほんの少しずつ伸びていって、1890年には47年になり、1910年には52年に、1930年には63年になる (Bourke, p. 6)。そして1990年におけるイギリス女性の平均寿命は78.1歳であり、また同年の日本女性の平均寿命は81.1歳である (国連, p. 136)。〈女の一生〉は1800年から約200年の間に量的にはほぼ二倍になったのである。40歳になったら〈統計上〉自分の一生はもう終わりだと思った女性と現代の女性との間には、〈一生〉の認識における断絶に近い差があると思わざるを得ない。

〈女の一生〉の量的、質的な変化を示すものとして、さらに reproductive years (出産可能期間) および最終出産年齢における変化がある。ヴィクトリア朝の女性の初潮年齢は16歳 (Pearson, p. 30), エドワード朝のそれは15歳、現代のそれは12歳以下である (Thompson, P., p. 279)。一方閉経の年齢はヴィクトリア朝の労働者女性の場合で early forties と推測されている (Rose, p. 90) が、1993年のアメリカの女性のそれは48.4歳である (Costello, p. 198)。出産可能年齢に入る年齢は著しく早くなり、それが終わる年齢もかなり遅くなった訳である。こういう変化も女性の意識や世界観に多大な影響を与えているであろうし、特に若年の女性に対する心理的な影響は大であろう。

しかし、〈女の一生〉にもっとも大きな質的变化をもたらしたのは、何といっても最終出産年齢における変化であろう。19世紀半ばのイギリスでの最終出産年齢は平均39歳であった。それに対して1930年代ではそれは32歳になり、さらに第2次世界大戦後に28歳となる (Bourke, p. 129)。しかもこの変化は、平均寿命の著しい伸びのなかで起こったのである。平均寿命と最終出産年齢の差は、19世紀半ばではせいぜい6、7年であったろう。ところが1990年では、その差は50年近くにもなるのである。これは〈女の一生〉の構造を根本から変えてしまうような変化であった。そしておそらくこの変化が

原因となって、主婦の職場への進出は始まるのである。

ただし、主婦の職場進出へのプロセスには〈前史〉がある。主婦の職場への大進出の前に、主婦の職場からの大撤退があったのである。主婦の就労率は1851年で約25%であった(Bourke, p. 62)。それが下がり続けて1901年には13%に、そして1911年には10%になる (Rose, p. 80) のである。19世紀から20世紀初頭までは、働いていた主婦の大部分は労働者階級の女性だったはずである。ところが、それが1911年までに10%にまで減少したのである。そしてその原因となったのは、gentility のイデオロギーであった。労働者階級の人達は、中流階級にならって、賃金労働をしない the angel of the house を作りだそうとしたのである。せめて妻だけには gentility の指標である〈不労〉の、ただしこの場合は賃金労働をしないという意味での〈不労〉の、ステイタスを与えようとしたのである。確かに産児制限の普及には、階級による〈時差〉があり、その結果、子供数には階級による差があった。1914年の階級別の子供数は professional の2.05人に対して labourers 4.09人である (Bédarida, p. 114)。だがそれにしても、労働者の子供数は、19世紀中葉に比べればはるかに減少していたはずなのに——すなわちこの頃には、労働者階級にも、最終出産年齢の低年齢化による女性の生涯の構造的変化が起っていたはずなのに——主婦の就労率は、10%にまで減少したのである。gentility のイデオロギーの圧力は、働く必要のある労働者階級的主婦まで家庭に囲いこんだのである。そしてこの状態は第2次大戦まで続くのである。

その後既婚女性の就労率は、1921年14%、1931年16%と少しずつ上がっていく。女性の生涯の構造的な変化が少しずつパーセンテージを押し上げている感じである。しかし、この頃はまだ、主婦の居場所は家庭にあるという gentility のイデオロギーは、健在である。だが、1951年になると、女性の生涯の構造的な変化は多数の主婦を職場に駆り立てる。1951年の主婦の就労率は40%である (Bourke, p. 100)。そしてその後それは1961年に52% (Ibid., p. 100) に増え、1970年代まではこれに近いパーセンテージにおさまっているが、1980年代には大幅に増え、1990年には economically inactive な主婦は、ついに19%になってしまう (Evetts, p. 17)。work といえば針仕事か good works (慈善活動) しかなかった——そしてその為に housewife syndrome に悩まされていた (Perkin, p. 182)——中流階級の主婦まで、本格的に働き

はじめたのである。女性の生涯の構造的な変化が、ヴィクトリア朝以来続いてきた *gentility* の壁をついに打ち破ったのである。もしドンビー夫人が現代に生きていたら、まずキャリア・ウーマンになっていたかも知れない。

ドンビー夫人がもし現代に生きていたとしたら、彼女にはもう一つの選択肢がありえた。離婚である。彼女はドンビー氏との結婚生活の十年目に男の子を産み、その為死に。彼女の結婚生活に関する短い記述のなかには、彼女がもっぱら「過去に生きる」不幸な女性であったという表現がある。この記述には、19世紀半ばには、相当なパーセンテージで存在したと言われる〈政略結婚〉(Wood, p. 79) が、暗示されている。だが、彼女がどれほどドンビー氏との結婚を悔やんでも、彼女には離婚という選択肢はなかった。イギリスでは離婚の申立ては1857年までは国会で審議されたのであるが、1837年から52年までの間の離婚申立ての件数は、わずか76件であり、しかも、その内女性からの申立てはわずか二件であった (Perkin, p. 123)。離婚訴訟にはかなりの費用がかかるうえに、当時の既婚女性には、自分のものといえる金は無かったのだから、一般に、女性からの離婚申立ては、事実上不可能だったのである。なお、上の二件は貴族の女性からの申立てである。勿論、ドンビー夫人にも、別居という選択肢はあったのであるが、世間体を重んずるドンビー氏は許さなかったであろう。

だが、離婚をめぐる状況、というよりも、結婚の安定性をめぐる状況は、徐々に変わってくる。先ず前に述べたように、1857年には離婚訴訟は国会での審議という手続きを必要としなくなり、それを受けて、1890年のイングランドとウェールズの離婚件数は、一年で400件になる (Bourke, p. 48)。婚姻訴訟法はその後も少しずつ改善され、1937年には完全に男女平等のものになる。そしてこういう法律上の変化を受けて、離婚のパーセンテージは徐々に上がってくる。1911年の離婚率はまだ低くて0.2%であるが、1950年代の半ばになると7%になり、1970年代には、三組のうち一組の夫婦が離婚するという状況になる (Weeks, p. 296) のである。さらに、1989年のアメリカでは、近い将来、三組のうち二組の夫婦が離婚するようになるだろうと予測されている (Baber, p. 36)。結婚の安定性は、ヴィクトリア朝時代では100パーセントに近いものだったのに、現代では60ないし30パーセントに落ち込んでいる訳である。結婚もまた〈女の一生〉の構造的な変化に繋がるような、量的、質的な変化を遂げている訳である。ドンビー夫人は、もし現代に生き

ていたら、そもそも気に染まない相手との結婚を先ずしていなかったろうし、まして我慢していなかったであろう。

結婚の安定性、あるいは不安定性に関するもう一つのデータを挙げておこう。それは総出産中の illegitimacy ratios (〈未婚の母〉による出産率) である。その率は19世紀半ばでは6%をちょっと越える程度であったが、1900年には4%弱になる。この率から見た場合、結婚の安定性は、19世紀半ばから20世紀初頭までは強まって来たわけである。その後〈未婚の母〉出産率は、第一次大戦後の6%強、第二次大戦後の9%強の場合を除けば、大体4%と5%の間に落ち着いていた。だが、1960年から徐々に上がり、1980年に9%になる。しかし、劇的な変化がここで起こる。1980年から毎年急激に増えて、1990年には実に29%になるのである (Bourke, p. 152)。離婚するカップルの増加と平行する形で、〈未婚の母〉による出産率は高まってきたのである。この背景には 'fallen woman' が 'single mother' になった変化、すなわち、〈未婚の母〉であることが social ostracism と結びつかなくなった変化がある。さらに、結婚による絆のなかで大きな位置を占めていた性の解放も進んだ。〈婚前交渉〉は、もはや結婚を前提としたカップル同志のものだけではなくなっているのである。もしヴィクトリア朝人が結婚の現状を見たら、結婚という制度は、もはや崩壊の危機に瀕していると言うであろう。なお、〈未婚の母〉にティーンエイジャーが多いという傾向が指摘されているが (マークス, 134頁)、この傾向は、前に述べた初潮年齢の低年齢化と無縁ではないと思われる。初潮年齢の低年齢化が原因で、若い人達が、出産可能年齢を、性的成熟年齢——一般的には19歳から24歳という (ダーデン—スミス, 301頁) ——と錯覚している可能性も無くはないからである。

さて、〈女の一生〉における様々な変化は、出産を安全なものにし、寿命を伸ばし、子育てに充てられる人生のパーセンテージを極端に小さくし、結婚を自由なものにした。しかしその一方で、現代の女性が、労働すること、つまり経済的な自立をはかり、消費者としての優位性を維持し、社会と接触し、家庭の外に生き甲斐を見いだすことを、運命と言っているようなものにした。しかしまたこれらの変化、特に寿命の伸びは、19世紀にはなかった——少なくとも極めて稀であった——新たな運命を女性にもたらした。

1800年のアメリカでは、55歳の女性で、両親のどちらかが存命中の女性は6%であった。1980年のアメリカではこのパーセンテージは60になってお

り、アメリカの女性は、少なくとも人生の20%を、親の care-giver として過ごすと言われている (Baber, p.166)。一方1985年のイギリスでは、55～59歳の女性の47%は親の carers であり、そのうち44%はパート・タイムカフル・タイムの仕事をしている (Evetts, p.89)。また1980年のイギリスでは、75歳以上の女性の53%は一人暮らしであったし、その後その率はさらに高くなっているという (Ibid., p.89)。

〈女の一生〉における様々な変化は、現代女性に大幅な自由の拡大をもたらした。だが一方で、労働は運命に近いものとなり、親の、また夫の世話をした後で、孤独な晩年を迎えることが〈標準的〉になってきている。ヴィクトリア朝の主婦を悩ました〈主婦症候群〉ではなく、特に晩年に来る〈終わり無き日常症候群〉が、現代女性の痼疾になってきているのである。Samuel Smiles の *Self-Help* は、ヴィクトリア朝の人達に、豊かな老後にそなえるための勤労と節儉を説いた本であるが、こういう「自助」の心構えこそ、現代女性に最も求められるものになっていると言えるだろう。

II. Wet-nurse をめぐるイデオロギー

Wet-nurse (乳母) は、『ドンビー父子商会』の登場人物で言えば、Polly Toodle である。ところで、乳母のポリーには〈大先輩〉がいる。シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』の乳母である。ただしこの乳母は、18世紀末に maternal breast-feeding が一般的になるまで (Stone, p.272)、上流階級の子供たちの面倒を見ていた乳母であり、その意味で、ドンビー夫人の死後に雇われたポリーの時代とは違う、もっとおおらかなイデオロギーが支配していた時代の乳母である。ディケンズの時代には、どの階級でも、何らかの事情で母親が母乳を与えられない場合以外は、乳母を雇うことは、認められなくなっていたのである。まずこの事情を、当時の〈家庭学〉の大家であった Mrs. Beeton の文章によって見てみよう。

When from illness, suppression of the milk, accident, or some natural process, the mother is deprived of the pleasure of rearing her infant, it becomes necessary at once to look round for a fitting substitute. (Mrs. Beeton, pp.1022-23)

18世紀末まで、上流階級の母親たちは、ビートン夫人の言う、「病気などの自然な事由」の場合以外でも、単に社交や睡眠の邪魔になるからとか、乳房の形が悪くなって、性的な魅力が失われるとかいう理由で、授乳しなかった (Stone, pp. 269-272)。だが、ディケンズの時代には、授乳によって「子供を育む欲び」は、家族主義の最も重要な——家族主義の基底にあってその感情的な核となる——経験となっていたのである。ついでに言えば、ビートン夫人の「自然な事由」は、それ以外の理由による、不自然な〈特権行使拒否〉を、柔らかい表現によってではあるが、強く戒めている。

ポリシー——上の文章中のビートン夫人の言葉で言えば「母親の代わりとなるしかるべき人物」——が採用されるまでの経緯は、『ドンビー父子商会』の第二章〈応急措置〉に詳しく描かれているが、ビートン夫人のマニュアルと『ドンビー父子商会』で、乳母の〈資格要件〉が、それぞれどう述べられているか見てみよう。まずビートン夫人の〈資格要件〉である。

The age, if possible, should not be less than twenty nor exceed thirty years, with the health sound in every respect, and body free from all eruptive disease or local blemish. The best evidence of a sound state of health will be found in the woman's clear open countenance, the ruddy tone of the skin, the full, round, and elastic state of breasts.....Besides her health, the moral state of the nurse is to be taken into account..... (Ibid., p. 1023)

年齢は二十から三十、あくまでも健康で、体には発疹、しみが無く、つやつやした顔、血色のよい肌、大きくて張りのある乳房の持ち主で、清く正しい人であること、というのが、ビートン夫人の乳母の〈資格要件〉である。このなかで幾分現代の読者に分かりにくいのは、体には発疹、しみが無い、という要件かも知れないが、当時は、〈体質〉は、母乳によって乳児に〈伝わる〉と信じられていたのである。さらに、清く正しい人であることが要件に入っているが、これは労働者階級の人達が道徳的に中流階級の人達よりも劣っていると信じられていた時代において当然の用心であると言える。つまりビートン夫人は、乳母を雇う際の working-class pollution (Shires, p. 39) ——すなわち、労働者階級による肉体的、道徳的「汚染」——を予防するた

めの〈心得〉を述べているのである。そのために、ここには、事務的と見える記述の陰から、中流階級のイデオロギーが顔を覗かせているのである。そしてその目で見れば、「あくまでも健康で」という条件がすでに〈階級的〉である。労働者階級の女性は健康でたくましく、また Perfect Lady は *consumptive weaklings* であるべきである、というのが当時の通念だった (Beddoe, pp. 26-7) からである。

ビートン夫人の乳母に対して、ディケンズの描くポリーは、五人の子持ちで当然育児の経験も充分ある「良く肥えた、血色のよい、健康そのものの、丸顔の若い女」である。ポリーに関する描写だけを取り出すと、ディケンズの〈資格要件〉は、ビートン夫人のそれを文学的に要約しただけの、いかにも簡単なものに見える。だが実は、ディケンズのそれの方が、ビートン夫人のそれよりもはるかに厳密である。そして、ポリーが採用されるまでの経緯には、濃密な中流階級のイデオロギーが顔を覗かせているのである。

ポリーは先ず、彼女が入院していた産院の婦長から推薦される。次に当人だけでなく、夫から子供たち、同居している妹まで健康状態を調べられ、〈面接試問〉を受ける。そしてそこでは、勿論、子供の一人の鼻の頭にある腫れ物——実は火傷の痕なのだが——が、「体質的な」ものでないことまで確かめられる。当然、結婚証明書、人物証明書なども細かく吟味される。ビートン夫人のマニュアルでは事務的に、あるいは遠慮がちに述べられている、労働者階級の肉体的、道徳的な「汚染」に対する予防措置が、徹底してとられる訳である。次に引用するのは、ポリーの道徳性に関するくだりである。

But she was a good plain sample of a nature that is ever, in the mass, better, truer, higher, nobler, quicker to feel, and much more constant to retain, all tenderness and pity, self-denial and devotion, than the nature of men. (*Dombey and Son*, Ch. 3)

引用文の文頭の「しかし」の前には、先ずポリーが一介の労働者の妻として地道に生きてきた、ごく普通の女性であることが述べられている。そしてそれに続いて、ポリーが、男性に比べれば、「全体として」、優しく、憐れみ深く、わが身を顧みず人に尽くす、道徳的な性の一員であるとディケンズは述

べている訳である。これはひとつには『ドンビー父子商会』が、男性のプライド、あるいは男性性に対して、女性の愛、あるいは女性性が最後に勝利するというテーマの物語であって、ポリリーが女性性の一つの柱になっているからであるが、またひとつには、ポリリーの道徳性を作者自らが読者に保証する必要があったからでもある。女性のほうが男性よりも道徳的であるというのは、当時の〈常識〉であったが、ディケンズはそれを利用したのである。

しかし、ここまでなら、ある意味で、『ドンビー父子商会』における乳母の資格要件は、ビートン夫人のマニュアルのそれとさして変わりはない。一層徹底して厳密になったというだけである。だがディケンズは、ドンビー氏を介して、中流階級の人達の心のなかに潜む、労働者階級の人達に対する根強い猜疑心、さらにまた恐怖、そしてそれを支えるイデオロギーを描く。先ずドンビー氏は、ポリリーの生まれただけの子も自分の子も、男の子であることから、ひょっとして二人が取り替えられるのではないかと心配する。また、ポリリー採用の条件として、この契約が単なる〈貸し借り〉の問題であって、すべて金銭によって処理されるべきものであることを強調し、乳児と乳母の間にかなる「愛着」も生じさせないよう、さらに、契約が終わった後は、たがいに全くの〈赤の他人〉になるよう、念を押す。ディケンズは、こういう病的な猜疑心と〈後腐れ〉に対する恐怖を描くことによって、労働者階級が中流階級への〈侵略〉を常に策しているという階級イデオロギーを、ユーモラスに、しかしリアルに描いたのである。そしてこの階級イデオロギーは、ジュリエットの乳母のように、三年授乳したあとでその子が成人するまで勤めるといったタイプの乳母の割合を減らし、乳母の多くを temporary (*Dombey and Son*, Ch. 3) にしていくのである。

ディケンズの『ドンビー父子商会』は、1846～48年に発表され、ビートン夫人の *Book of Household Management* の初版は——おそらくそれまでに彼女が書いたものの集大成として——1861年に出ている。そして両者は同じイデオロギーを含んでいる。ただし、ディケンズがそのイデオロギーを意識的に捉え、批判的に描いているのに対して、ビートン夫人はもっぱら〈事務的〉である。乳母の採用というまことに小さな事柄について、『ドンビー父子商会』が、ビートン夫人のマニュアルの〈必要な注釈〉である所以である。

ところで上記のイデオロギーは、あらゆるイデオロギーの例に漏れず、仮

想敵に対する恐怖、あるいは憎悪を煽るような、最上級の、あるいは究極の形を持っている。

Graham warns against the selection of a nurse with a less than perfect moral character :

Her very blood, and therefore her milk, is commonly tainted by her bad disposition and evil tempers: and she never fails by her voice, manner, looks, etc., to stir up, more or less, the evil passions of the child, and thus to injure it physically, intellectually, and morally. (Shires, p. 40)

グレアムは当時の小児科医であるが、彼の説では母乳は血液と同一視され、体質にとどまらず、悪い性質まで乳児に〈伝える〉ものとなっている。当時血液は——少なくとも一般人のレベルでは——〈水よりも濃い〉と考えられていたのだから、この結合は、ヴィクトリア朝人には強烈な衝撃を与えたであろう。また後段の、声、態度、顔つき等が「有害な情熱」を起こさせ、肉体的、知的、道徳的な害を及ぼすという説は、20世紀の人類学者などが唱える、授乳の仕方が性格形成に影響するという考え方に似ているが、実は「有害な情熱」が指しているのは、性的情熱であろう。つまり、ここでグレアムが訴えているのは、労働者階級の性的放縦による性的汚染であろう。性の目覚めは遅いほど知性等の発達に良い、というのが当時の考え方だったのだから、この訴えも、強い恐怖感を中流階級の人達の心に呼び起こしたはずである。だが勿論、ディケンズもビートン夫人もこれほど極端な考え方は信じていなかった。

しかし、穏健な、また過激なイデオロギーが働く場であった乳母という存在は、減び行く運命にあった。乳母の需要は、1840年代から徐々に減っていく。そして60年代、70年代とさらに減っていった、80年代の前半で、ごく少数の例外を除いて、存在しなくなる (Gathorne-Hardy, p. 42)。60年代末からベビー・フードと粉ミルクが、80年代のうちにコンデンスト・ミルクが売り出され、1890年代には、コンデンスト・ミルクは多量に市場に出回り、滅菌ミルクも買えるようになっていったからである (Thompson, F. M. L., p. 121)。一つのイデオロギーの体系が、母乳に代わる安全で栄養価のある飲食

物の開発とともにイギリスの社会から姿を消したのである。

III. Servants

ヴィクトリア朝時代は召使抜きでは考えられない。先ず『大いなる遺産』(*Great Expectations*, 1860-61) 二十二章の、ポケット家における召使と主人の描写を見てみよう。ポケット夫人には七人の子供がいて、二人の保母が子供たちを庭で遊ばせている。夫人は椅子に座り、足台に足を乗せて読書している。子供たちが何をしようとお構い無しである。余り子供の事を構い付けないので業を煮やした保母の一人が赤ん坊を彼女に預けるが、彼女は直ぐに保母に返してしまう。

ディケンズは勿論、上に私が要約した様子を巧みにユーモラスに描いているのであるが、これは、多少誇張はあり、歪曲はあるにしても、ヴィクトリア朝の中流階級以上のすべての主婦の姿であると言える。なぜなら、ここに描かれているのは、育児という仕事をまったく他人に委ねてしまった主婦の姿だからである。そしてこの育児の仕事を、女性の召使のほぼ一割にあたる人達が〈請け負って〉いた (Gathorne-Hardy, p. 180) のである。

勿論、中流階級以上の女性が他人に委ねてしまった仕事は育児だけではなく。ポケット夫人もその一人なのだが、経済的なゆとりがある場合には、あらゆる家事を彼女たちは召使に〈委託〉したのである。そして次に引くテースの文章はその事の意味を見事に捉えている。

Taine grasped the essence of the family ideal:

The ideal.....is a dry, stoutly roofed, well-heated house; evenings tête-à-tête with a faithful wife, who must be a good housekeeper and neatly dressed. The rosy cheeks of well-washed children in clean linen, the sight of good clear fire, and abundance of furniture, utensils, ornaments useful or otherwise agreeable, well set out, well polished.....[and, inevitably], respectful servants. (Roebuck, p. 29)

テースはここで「家庭の理想」の構成要素、すなわち「暖房のきいた家」、

奥方が着ている「こぎれいな服」, 「きれいに洗った子供のほっぺ」, 「磨き上げた家具」の最後に召使を挙げている。召使は先ず理想的な家庭に無くてはならない道具立てのひとつとして捉えられている訳である。テームのこの観察は興味深い。彼は、家が暖いのも、奥方の服や子供のほっぺがきれいなのも、家具がびかびかなのも、すべて召使のためだという事実よりも、召使が理想的な家庭の道具立ての一部であることを重視しているからである。

つまりテームは、召使を含めて、温かい家からびかびかの家具にいたるすべてを、その実際的な意味よりも、象徴的な意味を優先させて捉えたのである。そしてその象徴的な意味とは、理想的な家庭の目指す *gentility* であり *gentility* のイデオロギーであった。大きな観点からすればこれは正しい。しかしテームは、召使が持っている機能を、大づかみな観察のなかで無視してしまうことによって、召使そのものが表している *gentility* のイデオロギーを捉え損ねているのである。そして召使が表している *gentility* のイデオロギーとは、中流階級女性の家庭における〈不労〉である。

イデオロギーとしての *gentility* は、〈不労〉のステイタスを与えるために、中流階級の女性を家に囲いこんだのであるが、それだけでは充分ではなかった。労働者階級の女性の場合とは違って、彼女たちの場合は、家の外だけでなく、家の中でも〈不労〉が保障されなければならなかったのである。外で働いていなくても、家で働いていたのでは、*genteel* なレディーとは言えないからである。そして何よりも先ずこのような *gentility* のイデオロギーを支える為に、実に多数の労働者階級の女性が動員されたのである。下の表は、世紀半ばからの女性の召使の数、および総人口ならびに女性人口中に占める割合に関するものである。

‘Female Domestic Servants’ and allied occupations

England and Wales	1851	1861	1871	1881
Female Indoors				
under 15	61,000	87,000	111,000	99,000
over 15	723,000	894,000	1,124,000	1,170,000
Total	784,000	981,000	1,235,000	1,269,000

Extras

(washerwoman,

charwoman, etc.)	187,000	233,000	251,000	276,000
Grand Total	971,000	1,214,000	1,486,000	1,545,000
as % of total population	5.4%	6.1%	6.5%	5.9%
as % of female population	10.6%	11.7%	12.8%	44.6%

(Best, p. 123)

1801年の召使総数は60万であった (Perkin, p. 143) という。当時の召使の男女比は一对八だったというから (川北, 157頁), 19世紀初頭で約53万人の女性の召使がいたことになる。そしてそこからすれば, 1851年には, 臨時雇いを入れた数で計算すれば, 女性の召使の数は倍に近い数になり, また, 1881年には三倍近くに増えていることになる。さらに, 召使が最も多かった1890年代半ばには, その数は, 男女合わせて200万であった (Horn, p. 180) と言われるが, 当時の召使の男女比は, 男の召使の不人気を反映して一对25程度であったろうと推測されるから, 世紀末の女性の召使の数は190万を越えていたことになる。19世紀初頭から約100年の間に, 女性の召使の数は実に四倍近くになった訳である。〈奥様不労〉のイデオロギーの作用は, 実に強烈なものだったのである。ちなみに召使の数は世紀末以降徐々に減り, 第二次大戦後に激減して, 1961年には103,000になり (Best, p. 121), イギリスの召使社会時代は終わる。ただし, 女性の意識の変化に伴って, 1991年のイギリスでは, 五歳以下の子供のいる professional workers 所帯の20%が paid childminders or nannies を使っている (Stockman, p. 89)。召使の一種が新しい形で復活したのである。そしてこれには, 子育ては自己実現の妨げになるから, 育児は公的な機関にまかせるか, 私的に育児係を雇うべきであるというフェミニズムのイデオロギー (Weedon, p. 18) が影響していると思われる。新しいイデオロギーが新しい召使の需要を生み出したのである。

上の表では女性の召使の人口に対する比率は, 5%から6%台であるが, この比率には当然地域差がある。1881年の場合で, ロンドンでは住民の15人に一人が, バースでは九人に一人が召使であったのに対して, 農村地帯では21人に一人, 工業地帯では30人に一人が召使であった (Horn, p. 27)。これは gentility の〈分布〉による地域差と言えるであろう。したがって, gen-

tility がもっとも集中していたロンドン西部地区では、ヴィクトリア朝中期から末期にいたるまで、女性人口の四分の一近くが召使であった (Ibid., p. 28)。分布と言えば、年齢による分布もある。上の表では、召使の女性の女性人口に占める率は10%から12%台であるが、年齢層で分ければ、五歳以上の女性の九人に一人、15~20歳の女性の三人に一人が召使であった (Best, pp. 123-4)。ここからは召使が若年層に集中していることが分かる。『骨董店』(*The Old Curiosity Shop*, 1840-41) の Marchioness のように、幼い頃から召使として働いていた子も多数いたのである。

ではこれらの召使はどういう家庭で働いていたのか。1871年の例では、123万の住み込みの〈女中〉のうち、三分の二は、general servant とか maid-of-all-servant と呼ばれていた人達であった (Horn, p. 18)。つまり、彼女たちは〈女中〉が一人だけか、せいぜい二人しかいない家庭に雇われていたのである。したがって、彼女たちの仕事は、家事の全てであった。この種の召使は、ディケンズの作品中の人物で言えば、上述の〈侯爵夫人〉である。次に引くのは当時の家事の一覧、つまり〈侯爵夫人〉の仕事の一覧である。

The duties of a woman servant in a middle-class household might include cooking, cleaning, sewing, washing, ironing, child care, filling and cleaning lamps, carrying coal and tending the open grates that heated individual rooms, hauling water up to bedrooms, and slops down, going on errands, carrying parcels and luggage, walking the ladies of the household to social functions and waiting to accompany them home (particularly after dark), ordering food and household supplies, dealing with tradespeople, and keeping the books. (Mitchell, p. 706)

最も豊かな家庭では、男女各13種類の (Briggs, p. 255) 召使——細かい分類では男女あわせて33種類の召使 (Horn, p. 39) ——が上記の家事と、上記以外の男の召使の仕事を担当した。また豊かな家庭では、cook, housemaid, nursemaid がこれらを担当した。しかし、中流下層の家庭に、あるいは『骨董店』の Brass 兄妹のように家庭を顧みない雇い主に雇われた maid-of-all-servant は、その名の示すとおり、朝の五時、六時から夜の10時、11時まで

働いて、これらの仕事をしなければならなかった。そしてその仕事は、いずれも現代に比べてはるかに手間のかかるものであった。ここではすべてについて述べる余裕はないので、幾つかを取り上げてみよう。

先ずランプの掃除と油の補填である。オイル・ランプは、家庭用のガス・ランプが普及しはじめる1880年代までは (Mitchell, p. 379), 蠟燭とともにもっとも一般的な照明器具であった。ランプにせよ蠟燭にせよ、当然、灯すには火が必要であるが、1845年に安全なマッチが出始め (Bédarida, p. 33), 1850年にそれがかなり安価になる (McNeil, p. 911) までは、灯を灯すためには、先ず tinder-box を使って火を起さなければならなかった。そしてそれは経験と熟練を要する仕事だったから、召使を雇う際の〈試問事項〉の一つであった (Anderson, p. 132)。同じヴィクトリア朝時代でも、灯を灯すことが朝一番の、しかも手間のかかる仕事であった——そしてその分だけ召使が大変だった——時期もあるのである。〈侯爵夫人〉も、『骨董店』の発表年代から見て、その時期に属する召使である。ちなみに電灯線が家庭用に引かれはじめるのは第1次大戦後からである (McNeil, p. 936)。召使は、この時期から徐々に、スイッチをひねれば灯がつけられるようになったわけである。

次は暖房のための仕事である。ミッチェルはこの仕事の最初に石炭運びを挙げているが、これは、石炭が地下室または裏庭の石炭小屋に置かれ、しかも、中流階級の家は vertical plan (Read, p. 29) によるものであったために、大変な力仕事であった。しかも当然のことながら、その石炭の燃え殻や灰は運び下ろさなければならなかった。したがって、当時の召使心得の中には、Never go upstairs empty handed, never go downstairs empty handed. (Gathorne-Hardy, p. 331) というのがあった。上げる方向に限らず、物を動かすのは、召使の仕事の重要な部分であった (Briggs, p. 225) から、そこから生まれた知恵であった。当然〈侯爵夫人〉もこの知恵の恩恵に浴した——というよりも物心付いた時からこの知恵の有り難みを思い知らされた——一人であろう。当時は、暖炉や周辺の掃除もさることながら、石炭運びが先ず重労働だったのである。ただし、中流階級下層の家庭では暖房すべき部屋の数は少なかったであろう。

ミッチェルが次に挙げている、水を選び上げ、汚水を選び下ろすという作業の水とは、家族の洗面用の水である。当時の水道は、家に水道が来ている

場合でも、台所までだったので、石炭の場合と同じように、湯や水は上下両方向に〈動かす〉必要があったのである。だがディケンズの晩年までの召使はまだ楽だった。中流階級の人が週一回入浴するようになったのは、1865年 (Bédarida, p. 33) だから、それ以前の召使は、入浴のための湯は運ぶ必要がなかったのである。逆に、1865年以降の召使には、台所で沸かした湯を寝室に運ぶ——水がはねても零れてもいいように台所で入浴する場合も多かったようであるが——という仕事が増えた訳である。なお、普通の家庭で栓をひねれば湯も水も出るようになるのは第1次大戦後である (McNeil, p. 936)。

ミッチェルの仕事一覧の中の、主人の供をするというのは、召使の仕事としては楽なほうに属するものだったであろう。だが、ストリートが、the 'drawing-room of the poor' であり、時には寝室でさえあったこの時代 (Barret-Ducrocq, p. 9) では、これは昼夜を問わず必要な仕事であったろう。それに、「特に暗くなってからは」genteel な女性の独り歩きは考えられないことであった。それは当時では、amorous encounters (Ibid., p. 9) を求めての行動とみなされたからである。『リトル・ドリット』 (*Little Dorritt*, 1855-57) の第I部十四章で、ディケンズは、リトル・ドリットに「生まれて初めての夜の外出」をさせ、深夜のロンドンを彷徨させ、都会の夜の恐ろしさを描いているが、昼でも〈外の世界〉が怖かった当時の中流階級の女性にとっては、この章は、大変恐ろしいものだったに違いない。

さて仕事についてはこれぐらいにして、召使と主人の関係を見てみよう。『骨董店』の Sally Brass は徹底的に〈侯爵夫人〉を管理する。彼女を台所に寝かせ、外から鍵を掛け、朝起こしに来たときまた鍵をあける。『ボズ』の *The Street—Morning* の女中のようにとぼけて朝寝をすることは出来ない仕組みになっているのである。鍵はここでは先ず徹底的な管理の象徴である。しかしまたここでは、鍵は中流階級の労働者階級の〈道徳性〉に対する根強い猜疑心を象徴するものでもある。この家では、食物の容器にはじまるあらゆるものにも鍵が掛けられているからである。勿論、例によってここには誇張がある。しかしそれにもかかわらず、この召使と主人の関係の描写は基本的にリアルなものと言える。ビートン夫人のマニュアルでも、一家の主婦は軍隊の司令官に擬されていて、管理は、主人の最重要課題となっている (Mrs. Beeton, p. 1) からであり、きめ細かな管理は、ある程度の猜疑心——

その猜疑心は小銭をわざと床や絨毯の下などに置いておいて、召使の〈道徳性〉を試す(Horn, p. 65)といった方法を生みだしたりもするのだが——を前提とするものだからである。

では、管理思想と猜疑心の支配するこの世界になぜ多数の労働者階級の女性がやってきたのか。理由は簡単である。労働者階級の女性は、職につき、自活する必要があったからである。そして少なくとも19世紀末までは、綿工業などの工業地帯は別として、女中奉公は、一番有利な仕事と考えられていたからである。ではその有利な点とは何だったのか。〈お屋敷〉で、家政に関するさまざまな事柄を学び、将来結婚して妻となり母となった時にそなえることができる。衣食住は保障されているから、たとえ家に仕送りしても、貯金ができる。貯金ができれば縁談も来やすくなる。それにそもそも農村にいるよりは町に出たほうが結婚のチャンスは大きくなる、などである(Read, p. 125)。つまり女中奉公は、労働者階級女性の結婚願望にもっとも良く応えるものだったのである。彼女たちを管理と猜疑心の支配する世界に入らせ、辛い仕事に耐えさせたものは、厳しい生活環境からの脱出に力点があった場合も相当あったであろうが、何よりも先ず結婚願望だったのである。

ディケンズの召使のなかにはどこまでも主人に忠誠を尽くす召使——『二都物語』(*A Tale of Two Cities*, 1859)のMiss Prossはその代表と言っていていいだろう——もいるが、『荒涼館』(*Bleak House*, 1852-3)のRachelのような悪い召使もいる。当時の召使に対する見方も、ディケンズの場合と同じように〈分裂〉している。良いほうの見方では、召使は総じて *respectable, worthy, honest* である(Briggs, p. 255)となる。しかし悪いほうの見方では、召使は *'no more like the gentry than dogs are like cats'* (Ibid., p. 255)と言われる。要するに召使そのものに、また主人の側の先入観と〈召使体験〉に、個人差があるということであろう。しかし、どういいう見方をしようが、両者は必要あるいは利害によって結ばれていて、その為には同じ屋根の下で共存して行かなければならない。そこでビートン夫人が提唱するのは、どこまでも〈淡い〉関係である。

The mistress.....never converses with her servants; never speaks but to gently give an order, ask a question, or say good morning and evening. (Read, p. 244)

管理者としての威厳を保ち、士気を高める為には「司令官」たる者は、命令し、質問し、朝晩の挨拶をする以外は口を利かないのが最善だと言うのである。だがある意味では、これも中流階級の人同志の付き合い方の応用に過ぎない。何故ならビートン夫人は、別の所で、知人の家を訪問した時の心得を次のように説いているからである。

During these visits, the manners should be easy and cheerful, and the subjects of conversation such as may be readily terminated. Serious discussions or arguments are to be altogether avoided. (Mrs. Beeton, p. 10)

交際はどこまでも浅く淡くというのが、家族以外の人間に対するヴィクトリア朝人の付き合い方の基本だったのである。勿論それに加えて、相手が召使の場合は、主人の側にⅡで見たような、労働者階級による汚染あるいは侵略に対する恐怖もあったのだから、両者の間に愛と信頼が生まれ、長い年月を共に過ごすようになる例は、そう多くはなかったであろう。1890年代のある調査では召使の大多数は二年足らずで奉公先を変えたという (Read, p. 29)。ただし19世紀でもヴィクトリア朝初期の頃には、特に農村地帯には、目上の人を無条件に敬う気風があって (Harrison, p. 93)、おまけに召使の多くは農村出身者だった。したがって、少なくともディケンズの時代にはまだ、そう〈高姿勢〉な召使はいなかったであろうから、彼の時代の召使〈定着率〉はもっと高かったであろう。

だが時代によって〈定着率〉に違いはあるにせよ、召使の大多数は奉公先を変えた。そしてその時、雇う側にも雇われる側にも頼りになるのが、character reference、すなわち前の主人の人物証明書であった。これはいわば前の主人が次の主人に送る内申書であり、成績証明書であったから、書く側には正確さが求められ、正確でなかった場合、これを罰する法律が1792年に作られている (Horn, p. 45)。だが召使の側から見れば、これは勤務評定であった。そして良い勤務評定が得られるように努力しなければ、再就職することはできなかった。つまりこれは召使管理の決め手となる〈制度〉だった訳である。

19世紀に入って、召使を使う層が拡大し、上述の〈制度〉も含めて、それ

だけ複雑になっていき、また、その形成と〈維持〉に、上・中流階級の全てと、労働者階級の多数が関与した、召使社会のイデオロギーは、1960年代に入って、召使が完全に一部特権階級だけのものになったと同時に消滅する。しかしそれまでは、そのイデオロギーは、上・中流階級と労働者階級を結合し、かつ共存させる、一つの巨大なイデオロギーの体系として存在していたのである。

Works cited

- Anderson, Bonnie S., et al., *A History of Their Own*, Penguin Books, 1990.
- Baber, Kristine M., et al., *Women & Families: Feminist Reconstructions*, Guildford Press, 1992.
- Barret-Ducrocq, Françoise, (trans., by John Howe), *Love in the Time of Victoria*, Verso, 1991.
- Bédarida, François, *A Social History of England, 1815-1880*, Routledge, 1990.
- Beddoe, Deirdre, *Discovering Women's History*, Pandora, 1989.
- Beeton, Isabella, *The Book of Household Management*, S. O. Beeton, 1861.
- Best, Geoffrey, *Mid-Victorian Britain, 1851-75*, Fontana Press, 1990.
- Bourke, Joanna, *Working-Class Cultures in Britain, 1890-1960*, Routledge, 1994.
- Briggs, Asa, *Victorian Things*, Penguin Books, 1990.
- Cosslett, Tess, *Women Writing Childbirth*, Manchester Univ. Press, 1994.
- Costello, Cynthia, et al., (eds.), *The American Woman 1994-95*, W. W. Norton, 1994.
- Doyal, Lesley, *What Makes Women Sick*, MacMillan, 1995.
- Evetts, Julia, *Women & Career: Themes and Issues in Advanced Industrial Societies*, Longman, 1994.
- Frazer, Elizabeth, et al., (eds.), *Ethics: A Feminist Reader*, Blackwell, 1993.
- Gathorne-Hardy, Jonathan, *The Rise and Fall of the British Nanny*, Weidenfeld, 1993.
- Harrison, J. F. C., *Early Victorian Britain, 1832-51*, Fontana Press, 1989.
- Horn, Pamela, *The Rise and Fall of the Victorian Servant*, Alan Sutton, 1986.
- McNeil, Ian, (ed.), *An Encyclopaedia of the History of Technology*, Routledge, 1990.
- Mingay, G. E., *The Transformation of Britain 1830-1939*, Paradin Books, 1987.
- Mitchell, Sally, (ed.), *Victorian Britain: An Encyclopedia*, Garland Pub-

- lishing, 1988.
- Pearson, Michael, *The Age of Consent*, David & Charles, 1972.
- Perkin, Joan, *Victorian Women*, John Murray, 1993.
- Read, Donald, *England 1868-1914*, Longman, 1987.
- Roebuck, Janet, *The Making of Modern English Society from 1850*, Routledge, 1982.
- Rose, Sonya O., *Limited Livelihoods*, Univ. of California Press, 1992.
- Shires, Linda M., (ed.), *Rewriting the Victorians: Theory, History, and the Politics of Gender*, Routledge, 1992.
- Stone, Lawrence, *The Family, Sex and Marriage in England, 1500-1800*, Harper Torchbooks, 1979.
- Stockman, Norman, et al., *Women's Work in East and West*, UCL Press, 1995.
- Thompson, F. M. L., *The Rise of Respectable Society*, Fontana, Press, 1988.
- Thompson, Paul, *The Edwardians: The Remaking of British Society*, Routledge, 1992.
- Weedon, Chris, *Feminist Practice & Poststructuralist Theory*, Basil Blackwell, 1989.
- Weeks, Jeffrey, *Sex, Politics & Society*, Longman, 1989.

邦語, 邦訳文献

- ジョー・ダーデン・スミス他著, 池上千寿子他訳, 『セックス&ブレイン』, 工作社, 1985。
- マークス寿子著, 『イギリス歳時記』, 講談社, 1994。
- 川北稔編, 『「非労働時間」の生活史』, リプロポート, 1987。
- 国際連合著, 日本統計協会訳, 『世界の女性』, 日本統計協会, 1992。